

小6ドローン操縦自在

高速レース、難しいコースも冷静

各務原市の松井君



競技の前に機材の確認をする松井暁音君＝郡上市美並町、ROBO Z屋外サーキット

小型無人機ドローンの中でも最小級の機体「マイクロドローン」で速さを競う全国規模のレース「ジャパンティードローンチャンピオンリーグ2021」が郡上市美並町で開かれた。全国の舞台に初めて挑んだのは、小学6年生でプロ選手の松井暁音君12。各務原市鵜沼宝積寺町。競技歴は約半年と浅いものの、県勢1位の奮闘を見せた。

(稲木悠司)

郡上市で競技歴半年、準決勝進む 全国大会

松井君はドローンスクールなどを運営する会社「ROBO Z(ロボッツ)」(郡上市美並町)に所属する選手の一人。スクールの運営を手伝う代わりに、機体や練習場所の提供を受けている。練習を重ね、難しいコースでも冷静に飛ぶ操縦技術を身に付けた。

約80キロで、レース中でも約40キロの速さで飛行する。レースに出場する準備は、主にアマチュア無線の4級以上の取得と、無線局の開設計の2種類。試験は小学生でも十分合格できる難易度だ。選手はそれぞれ自分の機体に改造を施して競技に臨む。

大会を終えた松井君は「ドローンは災害で今より活躍するようになると思う。たくさんの人にドローンに関心を持ってもらいたい」と語った。

マイクロドローンレースは10代前半に優秀な選手が多いという。今回決勝戦に出場した3人は全員が中学生以下だった。ロボッツの石田宏樹社長(46)は「子どもたちの操作のうまさが増えた」と振り返る。「マイクロドローンは安全性が比較的高く、手軽に動かせる。競技をさらに盛り上げていきたい」と語った。

会場は郡上市美並町のROBO Z屋外サーキットで、全国的に珍しい屋外のレース。年間12会場で開催される競技会の一つで、全国に配信され、優勝者には賞金も出る。県内外の10〜50代の21人が出場。3人ずつスタートし、トーナメントで競った。

1回戦を突破した松井君は、縫うように通過する雲梯のような障害物「グラビティ」を最大の難所と捉えて臨んだ。準決勝では目立ったミスなくレースを運び、素早い切り返してゴール。決勝進出は



マイクロドローンレースで使用する小型の機体＝同



岐阜新聞
Webに動画